

どの発達段階にあっても
「集団の学び」が大切

&

できるかぎり
「地域に学校を残したい」

「新たな学びの場」を考える3つの視点

I 発達段階に応じた学びはどのようにあるべきか

- ・友達との遊びの中にも学びの勉強もあり、気づかぬうちに学ぶ意欲・態度や人間性等の学力を育てている(B20)
- ・小学校高学年以上では集団の中で学び、専門的な学びや多様な経験が大切(A4・7)
- ・小学校高学年と中学校の学力的な連携が大事(A5)
- ・小学校中学年までは少人数になった場合、地域の見守りの中で育つことや通学距離の問題も配慮したい(A6)

イメージ案
資料2-2

II 発達段階に応じた学びを実現するための規模はどのくらいか

- ・協働学習や共同作業により、子ども同士が互いの学びあいを通じて自己の考えを広げ深めることが大切(A14・15・19、B25・32・33)
- ・音楽や体育はある程度の集団が必要ではないか(A16)
- ・学年があがるにつれ大きな集団環境が大事ではないか(B31)
- ・少なくとも小学校高学年以降は学年に複数の学級が望ましい(B26)
- ・学級数が少ないと教員の数(教員配当基準)も少なくなり、学習保障(特に専門的な教科)や教育の質(教員研修等)の保障が難しい(A13、C38・39・44)
- ・財政面から、小規模校が増えることは、ある程度の歯止めが必要ではないか(C40)
- ・PTA役員等の保護者負担も考える必要がある(C37・43)

III 地域との関わりから

- ・地域により地域とのつながり方が異なり、それぞれの地域にあった学校群を考えたかどうか(D52・53・54)
- ・施設の複合化や多機能化の検討も必要ではないか(C45)
- ・通学区と行政区はいずれは一致させるべきではないか(E61)